様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６６０
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２５９６

研究課題名（和文）アーカイブと共同体の文化人類学的研究－イスラエル・ホロコースト博物館を中心に

研究課題名（英文）Anthropological Study of Archive and Community: A Case of Holocaust Museum in Israel

研究代表者
宇田川　彩（Udagawa, Aya）

東京理科大学・教養教育研究院葛飾キャンパス教養部・講師

研究者番号：２０８１４０３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：「アーカイブと共同体の文化人類学的研究」においては、実際に人びとが資料とともに語ったり、資料を寄贈したり選別したりといった動態的なプロセスの中で現れてくるユダヤ共同体の史観やアイデンティティについて考察することができた。本研究前期にはイスラエル、後期にはオーストラリアで現地調査を行った。イスラエルにおいては、博物館や記念日を通じた公的な記憶の場の表れについて研究した。他方、移住からの歴史が浅い共同体であるオーストラリアにおいては、共同体の形成過程でどのように博物館や教育が歴史を構築していくかを考察することができた。以上の成果は、シンポジウム、著書、論文として公表された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、資料と人が関わり合いながら記憶の場が生まれていく過程を明らかにしたものであり、記憶研究や歴史研究において重要な意義を持つ。また、現在、イスラエル／パレスチナは戦争状態にある。本研究は必ずしも現代政治や国際関係にかかわるものではないが、しかし現代ユダヤ世界を考える上では「記憶」は欠かせないテーマである。現在のユダヤ人やイスラエル人の世界観は、ホロコーストをはじめとした迫害の歴史や、移動の家族史に裏打ちされているからである。現代日本においても、戦災や被災とかかわる歴史の継承は問題とされており、理論的な側面から互いに議論可能なものと考える。

研究成果の概要（英文）：In the "Cultural Anthropological Study of Archive and Community," I was able to examine the historical perspectives and identities of the Jewish community as they emerge in the dynamic process of people actually speaking with materials and donating and selecting materials. Field research was conducted in Israel in the first semester of this study and in Australia in the second semester. In Israel, I studied the manifestations of public memory sites through museums and commemorative days. On the other hand, in Australia, a community with a short history since immigration, it was possible to examine how museums and education construct history in the process of community formation. The above results were published as a symposium, a book, and an article.

研究分野：文化人類学

キーワード：記憶　博物館　アーカイブ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究が開始されたのは、アルゼンチンのユダヤ人を対象として行ったフィールドワークに基づき、博士論文『アルゼンチンの世俗的ユダヤ人における生と探求』を提出し終わった直後のことであった。したがって、本研究プロジェクトは、博士論文以降の新しい研究をいかに開始し、将来の研究につなぎうるかという重要な時期に行われた。コロナ禍と育児休業取得のため、計画通りに進まなかった側面もあり、研究開始当初の予定（3 年間）を大幅に延長し、計 6 年間の研究となった。

開始当初、アルゼンチンにおいて行ってきた成果の一部は次の通りである。記憶が継承される過程に焦点を当てた場合、継承には二種類の論理が存在する。ある事例では、親から子へと継承される記憶の「家族的な継承」がユダヤ的な倫理として語られ、写真や物語はかけがえのない個人によって共有される。他方で、同様に物語が語られ／書かれるという契機により、家族をめぐる記憶が普遍的な集合的記憶として共有される可能性もある。こうした個別性と普遍性とのあいだの揺れ動きが、写真という媒体と書かれた媒体との間の相互交渉によって論じた。また、家庭において儀礼という形で反復される記憶については、出エジプトを想起する「過ぎ越し祭」という儀礼について論文「儀礼の『順番』と物語」に論じた。

これらの博士課程における研究から、本科研課題に研究を広げるにあたり、議論の対象を広げることが大きな課題であった。すなわち、私的領域（家・家族・個別的な記憶のあり方）から公的領域へ（国家的・制度的な記憶のあり方）、それと同時にフィールドワークの対象もモノ・写真・食（アルゼンチンでの研究）から、アーカイブ・博物館（イスラエルでの研究）へと変わっていったのである。

２．研究の目的

(1)　本研究の目的は、アーカイブに集積される資料や展示される歴史の物語を所与のものとして捉えず、資料が回収・流通・展示される過程を追い、過去の出来事が「ユダヤ民族の記憶」として共有／想像される動態を明らかにすることである。特にイスラエル・ホロコースト博物館でのフィールドワークを通し、個人や家族の所有物であった資料（写真や書類、モノ）が、集合的な歴史資料へと変容する過程を問う。とりわけ、ホロコースト博物館の場合、ホロコーストを体験したユダヤ人が世界中に散在するため、国家の枠組みを超えて各個人の経験談や一次資料を収集し、「民族」の集合的記憶として想起させる必要がある。また、戦後には同様の博物館が世界各地で建てられ、希少性の高い一次資料を巡り複数国の博物館が競合する状況にある。このようなトランスナショナルな関係の中でアーカイブが果たす役割を明らかにする。

(2)　イスラエルでの在外研究中の 2019 年頃からは、アートを通したユダヤ人の記憶の解釈と表現に関心を持つようになった。イスラエルは、モニュメントや博物館など通し、揺るがないナショナルな記憶の場を構築してきた。儀礼的な再上演や教育を通して、公的で政治的な解釈は再生産されているようにも見えた。他方で、同時代のアート作品に目を向けた時、構築された記憶の場を揺るがす、異なる解釈と呈示が見て取れた。これまでユダヤ人について研究してきた関心の根底には、「私」を私ならしめる私的で個人的な物事と、その外に広がる想像の「私たち」を何らかの集団ならしめる物事の間のつながりという問いがあった。この問いを根底に置き、何らかの過去とかかわり、解釈をアートが生まれる現場に着目していく。

３．研究の方法

(1)　イスラエルにおける現地調査（2018 年 10 月～2020 年 2 月）

①研究の第一段階として、イスラエル各地に点在するホロコースト関連の博物館・アーカイブ（北部：テレジンシュタット博物館、ゲットーファイターズ博物館等 4 館、中央部ヤドヴァシェム等、南部ヤド・モルデハイ等 2 館）について、その性格と概要を知るため訪問し、それぞれインタビューを行った。当初の計画通り、エルサレムにあるホロコースト博物館（ヤドヴァシェム）を主要な研究対象とすることに変更はないが、あわせてイスラエル南部にある「キブツ・ヤド・モルデハイ」にも焦点を当て、比較対象とする。前者はイスラエル唯一のホロコーストに関する国立博物館であり、最もオフィシャルで巨大な研究施設としても機能している。

②「イスラエル国立アーカイブとデジタル化の思惑」　本調査は、アーカイブに蠢く様々な政治的な思惑や、人とモノのダイナミズムに焦点を当て、「イスラエル国立アーカイブ」での資料のデジタル化について、アーキビストと関連する NGO のディレクターへのインタビューを通

じて考察した。イスラエル管轄下にあるアーカイブにおいて、国家安全（軍事）保障を理由に開示拒否される資料には、読まれたくない不都合なナラティブが含まれている。他方で、パレスチナには組織化されたアーカイブが存在しないため、圧倒的な情報量の不均衡が存在する。イスラエル国内には、レベル・規模・テーマの異なるアーカイブが数多く存在する。その一つ一つに、異なる歴史観と人びとの思惑が詰まっている。デジタル化されたアーカイブは資料の在り処と出どころを想像させない独特の空間を作り上げているが、その水面下には複雑なダイナミズムが潜んでいることが確認された。

③「アーカイブと現代アート活動」
アーカイブ資料を用い、歴史や記憶をテーマとして制作された同時代のアート作品へ注目した。イスラエルにおける博物館展示や歴史叙述は、しばしばイスラエル国家のアイデンティティ構築や教育的な意味合いから、オフィシャルな歴史叙述が行われる。他方で、モニュメントや博物館に呈示される歴史／記憶ではなく、その不在自体をテーマにした作品を制作するアーティストや、ホロコーストや 1948 年の独立戦争といったテーマを取り扱いながら独自の解釈を織り込んだアーティストの事例が見られた。

(2)　オーストラリアにおける現地調査（2024 年 3 月）

オーストラリアは、これまでに研究をしてきたイスラエルやアルゼンチンと比較して、移住からの歴史が浅いところに特徴がある。シドニーおよびメルボルンのユダヤ博物館では、それぞれのアーキビストやキュレーターとのインタビューを通し、一貫した歴史観やアイデンティティがいまだ生まれておらず、教育や博物館展示によってまさに「オーストラリアのユダヤ性」が生じつつあるプロセスについて聴き取ることができた。また、複数のユダヤ人アーティストとのインタビューを通し、家族の歴史や政治的状況を解釈し、作品として昇華させること、またユダヤ人アーティストとしてのアイデンティティや困難さについても聴き取りができた。

４．研究成果

(1)　博物館とホロコーストにかんする教育についての研究報告：　2018 年 7 月に行われた国際学会 European Jewish Studies Association（於・ポーランド、クラクフ）では、日本におけるホロコースト教育と博物館を対象とした口頭発表を行った。この発表では、ポーランドやドイツから資料が日本にもたらされるに至った経緯を中心とし、日本で設立された博物館で語られるホロコーストについて考察した。

(2)　調査報告　「イスラエル国立アーカイブとデジタル化の思惑」2020 年 3 月、『東京大学中東地域研究センターニューズレター』第 16 号　。「イスラエル国立アーカイブ」での資料のデジタル化について、アーキビストと関連する NGO のディレクターへのインタビューを通じて考察した。

(3)　イスラエルにおける、ナショナルな記憶の場と、記憶の場にかかわる人びとの動的な資料とのかかわりについて考察した：モニュメントに表象される歴史と、アート作品により与えられる現代的な解釈の交錯する場について検討する。事例として取り扱うのは、イスラエル南部の「キブツ・ヤド・モルデハイ」にある「モルデハイ・アニレヴィチ像」である。モニュメントという空間の周辺では――当初、アニレヴィチ像を設置したキブツメンバーの目論見とは無関係に――「ホロコーストから再生へ」というナショナルなナラティブが再生産され続けているように見える。他方、同時代のアート作品に目を向けた時、アニレヴィチ像を中心として構築された記憶の場を揺るがす、異なる解釈と呈示が見て取れる。
「ナショナルな記憶を解きほぐす――『ホロコーストと再生』のモニュメントを中心に」2019 年 7 月ディアスポラの記憶と想起の媒体」（科研費基盤研究 B）研究会、東洋大学　（口頭発表）および、国際シンポジウム Diasporic Memory, Art for Survival: Music and Art of the Jews, the Roma and the Atomic Bomb Survivors in Hiroshima の企画・招聘および発表（京都大学，2023 年 3 月）。
イスラエル人アーティスト Gil Yefman 氏を国際シンポジウムへ招聘し、企画、翻訳を担当した。（Gil Yefman 発表　“History, Memory and Imagination: Kibbutz Buchenwald and its Unfolding Texture”）

(4)　過去と「起源」の探究という視点の発見：　アルゼンチンにおいてもイスラエルにおいても、多様な民族的な起源を探究し、ユダヤ人としての歴史を構築しようとするときに「起源」をどこに発見するのかという問いが現れることに着目した。

「ユダヤ人の記憶をつなぐもの――アルゼンチンのユダヤ人の「起源」をめぐる一考察」近現代インドのユダヤ教徒ライフ・ヒストリーと「国民国家」研究会，東京大学，2022 年 12 月 13 日。

(5)　オーストラリア調査の成果報告としては、以下の論文を準備中である。新たにユダヤ共同体が形成されつつある過程にある地域において、どのように歴史が紡がれていくのか。オーストラリアにおいては、20 世紀後半から、ロシア、南アフリカ等のいくつかの移住の波を経て「オーストラリア」という一つの枠組みを探究している過程にある。その過程において、博物館やアーカイブがどのようにかかわっているのかを論じる。
　論文『ユダヤ博物館における展示と教育――オーストラリアの事例』（東京理科大学高等教育研究院紀要）　2024 年 8 月投稿予定。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 宇田川彩	４．巻 87
２．論文標題 「せめぎ合う霊力」（レビュー論文）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.87.1_120	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宇田川彩	４．巻 24
２．論文標題 イスラエル・嘆きの壁で祈る女性たち	５．発行年 2020年
３．雑誌名 FIELDPLUS	６．最初と最後の頁 24-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宇田川彩	４．巻 15
２．論文標題 調査報告　「イスラエル国立アーカイブとデジタル化の思惑」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京大学中東地域研究センターニューズレター	６．最初と最後の頁 13-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 宇田川彩
２．発表標題 ユダヤディアスポラ再考
３．学会等名 日本文化人類学学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 宇田川彩
２．発表標題 「ナショナルな記憶を解きほぐす――『ホロコーストと再生』のモニュメントを中心に
３．学会等名 ディアスポラの記憶と想起の媒体研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Aya Udagawa
２．発表標題 “Archiving Holocaust Materials: An Anthropological Perspective on Memory and Archive”
３．学会等名 European Jewish Studies Association（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Aya Udagawa
２．発表標題 How does Art Make the Past? Kibbutz Yad Mordechai and Holocaust Monuments in Israel
３．学会等名 Diasporic Memory, Art for Survival: Music and Art of the Jews, the Roma and the Atomic Bomb Survivors in Hiroshima（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 宇田川彩
２．発表標題 「中東から広がるユダヤ世界：南米とのネットワークを中心に」
３．学会等名 中東学会（招待講演）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計2件

1．著者名 宇田川彩	4．発行年 2020年
2．出版社 世界思想社	5．総ページ数 -
3．書名 それでもなおユダヤ人であること－現代ブエノスアイレスに 生きる〈記憶の民〉	

1．著者名 宇田川彩（担当執筆）	4．発行年 2024年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 324
3．書名 パレスチナ／イスラエルの〈いま〉を知るための24章（エリア・スタディーズ）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

世界ユダヤ紀行
https://web.sekaishisosha.jp/categories/915

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関